

## 150名履修の情報実習科目における授業補佐の役割に関する実践報告

—関西学院大学「コンピュータ基礎」科目をもとに—

笹谷知輝<sup>†1</sup> 西村幸一朗<sup>†2</sup> 吉田典弘<sup>†3</sup>

**概要**：本稿では、関西学院大学の共通教育科目である「コンピュータ基礎」科目の授業形態とそれに伴う授業補佐（以下、SA）の役割について、実践報告を行う。「コンピュータ基礎」は導入情報教育としての実習科目であり、一部の学部を除いて全ての1年次以上の学生が履修できる科目である。本科目は同時履修人数最大150名の授業で、150名の履修生は教員のいるA教室と教員のいないB教室を自らで選択し、受講する。B教室には教員の声と教員のモニターが共有され、受講生はそれに従って演習等を行う。また、受講生からの質問等に備えて、A、B教室合わせて5名のSAが配置されている。本稿では、履修生とSAを対象に本科目に対する意識調査を行った。これに加えて、最終試験の得点と教室の利用状況に関係がないかを調査した。これらの調査の結果、150名の履修者、2つの教室であってもSAが居ることで授業運営が行えることを報告する。

**キーワード**：授業補佐、情報リテラシー、大人数授業

### Roles of Student Assistants in Practical Information Course Consisting of 150 Students

Based on "Computer Literacy" in Kwansei Gakuin University

TOMOKI SASAYA<sup>†1</sup> KOICHIRO NISHIMURA<sup>†2</sup>  
NORIHIRO YOSHIDA<sup>†3</sup>

**Abstract** : We will report the form of "Computer Literacy" course in Kwansei Gakuin University and roles of SA(Student Assistant) in the course. "Computer Literacy" is a practical training courses as an introduction information education, which can be taken by all students except for the part of the faculties. This course can be taken by up to 150 students simultaneously, and each student of 150 selects in himself to attend between classroom A with a lecturer and classroom B without lecturers. The classroom B is shared voice and monitor of the lecturer, and students in classroom B exercises in accordance with it. Also, in preparation for the questions from the students, SA from a total of five are in charge of two classrooms. In this paper, we surveyed attitudes for this course of the students and SA. In addition to this, we investigated whether there are any relationships the result of the final examination and choosing a classroom to attend. The results of these investigations, we will reports that tuitions even with 150 students in the two classrooms can be performed when SA are located.

**Keywords** : Class Assistant, Information Literacy, Large Class

### 1.はじめに

昨今の情報科学の発展は目覚ましいものがある。Internet of Things (IoT) など情報技術がますます身近なものとなり、

生活には欠かせないものとなってきている。そのような社会において、高等教育における情報教育（一般情報教育）も一層重要性を増している。「一般情報処理教育の知識体系（GEBOK）」[1]によると、“一般情報教育の教育目標は、情報およびコンピュータに関する基礎理論や概念および応用知識を理解させるとともに、それらを自由自在に活用できる技能を身に付けさせること”とあり、各大学がそれぞれ一般情報教育を行っている。その割合も高く、岡部[2][3]によると2013年度には必修や必修相当科目として9割余りの大学が一般情報科目を設置している。しかし、その教育

†1 関西学院大学経済学部  
Kwansei Gakuin University, Faculty of Economics

†2 関西学院大学法学部  
Kwansei Gakuin University, Faculty of Law and Politics

†3 関西学院大学共通教育センター  
Kwansei Gakuin University,  
Center for Common Educational Programs

にも課題は多い。情報教育は PC を使用した演習授業なしには行えない。特に、学生数の多い大規模な大学では全学生に十分な教育を行うことは難しく、これが課題となっている。

布施ら[4][5]では演習型の情報教育における授業補佐の有用性についてまとめている。北海道大学「情報学 I」は、統一カリキュラムでおこない、ほぼすべての学生が履修している。特徴は約 2600 人の入学生を 20 人程度にグループングした少人数教育であるということである。そのグループひとつにつき、ひとりの TA (Teaching Assistant) が担当し、さらに、グループを 10 程度にまとめたグループ全体を担当教員が受けもつ。また、TA が授業に関わることのメリットとして、学習者と年齢が近く、身近に感じられることや、つまずき、成功等の経験を持っているなどを挙げている。さらに、吉田ら[6]でも、情報基礎科目における SA (Student Assistant) の役割について報告を行っている。これらの研究から、TA や SA は教員と学習者の中間に立つことにより、授業の重要な役割を果たしており、必要にされているということがわかる。

本稿における調査のきっかけは、SA として「コンピュータ基礎」で業務を勤める中で、履修生によって様々に異なる点があると考え、SA と履修生がこの授業形態に満足をしているのだろうか、ということに疑問を覚えたことにある。関西学院大学には 150 名履修の「コンピュータ基礎」をはじめとして「コンピュータ実践」や「コンピュータ言語」などの全学対象の情報演習科目が 16 科目開講されている (2015 年度)。筆者らはそれらの授業で 3 年間 SA として業務を行ってきた。この中でも、情報基礎科目である「コンピュータ基礎」は最も受講者数が多く、SA の役割が特に必要とされる重要な科目である。そのため、この科目を対象に調査を行った。

関西学院大学における情報基礎科目を報告することにより、情報教育の発展への貢献が期待される。そこで、主に「コンピュータ基礎」に対する履修生、SA の捉え方のアンケート調査と最終試験の結果の計量分析から、本科目の優位性、問題点を明らかにする。特に、SA の本科目への貢献に着目し、この貢献が本科目の運営上の重要な役割を担っていることを示す。

本稿の構成は次のようになっている。2 章では、「コンピュータ基礎」と SA の概要について説明する。3 章では実施したアンケートと最終試験結果を用いて、本科目に対する履修生や SA の捉え方、授業形態の問題点や SA の必要性について分析、考察を行う。最後に 4 章では、本稿のまとめを行う。

## 2. コンピュータ基礎と SA の現状

### 2.1 コンピュータ基礎とは

関西学院大学の「コンピュータ基礎」のシラバスには以

下のような記載がある。“初めてコンピュータを使う人のために、コンピュータやネットワークの基礎知識、情報倫理、電子メールの送受信、インターネット情報検索、表計算、ワープロ、多言語文字入力、プレゼンテーションソフトの操作方法など実際にコンピュータを操作しながら学習する。”

「コンピュータ基礎」は 1 年次以上の文科系学部の履修生が履修可能な情報基礎科目である。2015 年度現在で履修可能な学部は、神学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部、人間福祉学部、国際学部である。「コンピュータ基礎」150 名のクラスは、春学期に 4 クラス、秋学期に 5 クラスの計 9 クラスを開講している。

履修が確定した 150 名の履修生は授業ごとに教員のいる 101A 教室 (以下、A 教室) と教員のいない 101B 教室 (以下、B 教室) を自らで選択し、受講する。A 教室と、B 教室は防音ガラスにて区切られているため、B 教室には教員の声と教員のモニターが共有され、受講生はそれによって演習等を行う。また、受講生からの質問等に備えて、A、B 教室合わせて 5 名の SA が配置されている。

150 人というクラスを同時に行う理由として、本科目を履修可能な学生が 13000 名[7]にもなることが挙げられる。多くの学生に授業を受けてもらう必要があることを考えると、運営上このような形で開講することは致し方無い。授業は、図 1 のような A 教室、B 教室を利用して行われる。

教員は基本的に A 教室にて講義を行うことが多い。なぜなら、B 教室の方が A 教室よりも床の高さが低く、B 教室にて教員が講義を行うと、A 教室の状態を全く把握できないからだ。A 教室であれば、後ろを振り向けば、B 教室の現状を把握することはできる。しかしながら、講義中は頻りに後ろを振り向くことはできない。そのため、授業担当教員による履修生の状況把握は難しい。

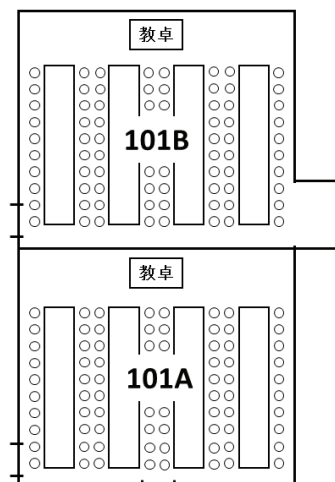


図 1 「コンピュータ基礎」の授業が行われる教室の見取り図

## 2.2 コンピュータ基礎の歴史

以下の表1は関西学院大学における「コンピュータ基礎」の変遷である。

表1 「コンピュータ基礎」の変遷

1976年度	情報処理センター開設
1990年度	全学科目「コンピュータ基礎」開講(44名定員, 10クラスで開始)
1992年度	Semester制の導入を受け「コンピュータ基礎A・B」に変更。(クラス数:A12・B12)
1996年度	「コンピュータ基礎A・B」(クラス数:A17・B16)
1997年度	「コンピュータ基礎A・B」(クラス数:A17・B18)
1998年度	<p>機器操作の補助を目的とした履修生の「授業補佐」制度の導入。</p> <p>授業補佐を付ける科目は「コンピュータ基礎B」のみ。「コンピュータ基礎A・B」(クラス数:A14・B14)4別101教室(階段状の大教室)をA, Bの2室に改修。利用率の低い教室, PC台数, 情報科学科目履修希望者数の増加等への対応。</p>
1999年度	情報処理研究センターを情報メディア教育センターに改組。「コンピュータ基礎A・B」(クラス数:A18・B16)
2000年度	「コンピュータ基礎A・B」(クラス数:A14・B22)
2001年度	カリキュラムの大幅改編。「コンピュータ初歩」(クラス数:春18・秋26)と「コンピュータ基礎」(クラス数:A・Bとも春, 秋1クラス)へ変更。
2002年度	「コンピュータ初歩」(クラス数:春18, 秋10)と「コンピュータ基礎」(クラス数:A・Bとも春集中各1)
2004年度	<p>開講科目は「コンピュータ実践」「コンピュータ言語」「コンピュータ基礎」のみに変更。</p> <p>「コンピュータ初歩」は廃止。そのことを受け、「コンピュータ基礎」での150人授業が始まる。</p>

## 2.3 SA に関して

関西学院大学情報科学科目では授業補佐のことをSAと呼んでおり, 主に文科系の学部生によって構成されている。具体的な業務に関しては以下である。共通教育センター開講の情報科学科目(履修基準年度1年生の全学科目)の授業, 授業前の準備作業(10分弱)及び授業後の作業(10

分程度)を授業担当者の指示に従って補佐する。「コンピュータ基礎」におけるSAの業務内容はPCの基本操作, ワードプロ・表計算ソフト, 電子メールの操作補助, 統計処理ソフト等専門関連ソフトの入門的な操作補助, 機器の故障等の際の管理者への連絡, その他, 授業に関する補助である。そして, 毎回の業務終了後, 「業務報告書」(機器等の障害トラブル報告・勤務報告を兼ねる)を提出する。

また, SAとなった学生は授業期間中に, 週1~2回開催の「授業補佐連絡会」に1回以上の出席をし, トラブルの情報共有やスキルアップのための情報共有を行っている。

## 3. データ分析

本章では2015年12月に履修生を対象に授業内で実施したアンケートとSAを対象に行ったアンケート, 当該クラスの最終試験の得点を分析し, 考察を行った。(なお, 履修生対象アンケート, SA対象アンケートについては, それぞれ付録(A), 付録(B)を参照のこと。)

これらのアンケートや試験の得点を分析する目的は, 経験に基づく筆者らの予測が正しいかどうかを検証することにある。

### 3.1 検証項目について

筆者らがSAを担当して感じた疑問点や興味のある点をもとに, 検証項目を提示する。

#### (1) 授業形態に対する意識

二つの教室に分けて授業を行っていることに対する履修生とSAの意識を検証する。本科目は二つの教室に分かれており一方の教室は教員が不在の見慣れない授業形態である。しかし, 履修生やSAはその授業形態に慣れているように感じることも少なくない。そこで, 実際には履修生やSAがこの授業に不満を感じているのかどうかを検証したい。

#### (2) 履修生の属性が試験得点に及ぼす影響

受講している教室や学年, 性別が試験の得点に与える影響について検証する。

教室に関しては, 経験上A教室の方が低い学年の履修生, 授業に積極的な履修生が多いような印象を受けている。一方で, B教室の方が友人等とともに受講している履修生が多いように感じる。そのためA教室において, 学年が低いことが得点に負の影響を与える可能性と, 積極性が得点に正の影響を与えることが考えられ, どちらの効果が優位であるかに着目したい。

#### (3) 履修生のSAに対する意識

履修生はSAを必要としているのかを検証する。本科目は150名の履修生に対して教員1名と5名のSAが配置されている。教員やSAはSAの存在は授業運営上必要なも

のであると考えて業務にあたっている。一方で、履修生は本当に SA を必要なものと捉えているのかという点に疑問を持った。また、履修生の質問から SA の有用性についても検証したい。

### 3.2 アンケートと最終試験の概要

各アンケートの調査対象などの概要と最終試験について示す。

#### 履修生対象アンケート

履修生へのアンケートの対象は 2015 年度「コンピュータ基礎」クラス 11 の履修生である。アンケートは 2015 年 12 月 22 日の授業中に Blackboard を用いて行った。回収できたサンプル数は 132 である。さらに、分析の都合上、無回答を含むサンプルは適宜削除している。

#### SA 対象アンケート

SA へのアンケートは「コンピュータ基礎」を担当経験のある SA を対象とし、2015 年 12 月にアンケートをデータで配布し、2016 年 1 月までにデータまたはプリントアウトされたものを回収した。回収できたサンプル数は 2015 年度秋学期 38 名の SA のうち、24 名であった。

#### 最終試験に関するデータ

2015 年度「コンピュータ基礎」クラス 11 の最終試験における受験者の得点、性別、学年、受験教室のデータを使用している。なお、最終試験の教室及び座席も履修生が自由に選択できるものとなっていた。

### 3.3 分析結果

先述した検証項目について、結果を示す。

#### (1) 授業形態に対する意識

履修生と SA の本科目の形態に関する意識の分析結果を示す。

履修生に「B 教室で受講したときに先生がいないと不都合があると思うか」について 5 段階で問い、「B 教室で受講したことがない」と答えた学生を除いて集計を行った (図 2)。「そうは思わない」と「どちらかというと思わない」をあわせると 57%、「そう思う」と「どちらかというと思おう」をあわせると、28%であった。過半数の履修生が不都合を感じておらず、また不都合を感じている履修生の数も顕著に多いとはいえない結果であった。

また、「教室が二つに分かれていることに関して、どのように思うか」を履修生に複数回答で問うた結果が図 3 である。119 名が「特に気にならない」と答えており、この授業形態に対して問題視していないことがわかる。また、「先生に質問しにくい」と答えたのも 8 名と少なく、質問を頻繁にしたい履修生は A 教室で受講していると考えられる。

さらに、SA に対しても「教室が二つに分かれていることに関して、どのように思うか」を調査した (図 4)。24 名中 12 名が「特に問題ないと思う」と答え、「授業運営に

B 教室で受講した時に、先生がいないと不都合があると思う

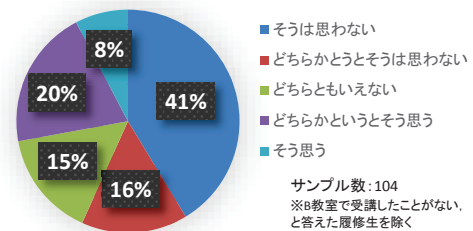


図 2 教員不在に対する履修生の意識

教室が二つに分かれていることに関して、どのように思うか (履修生対象、複数回答)

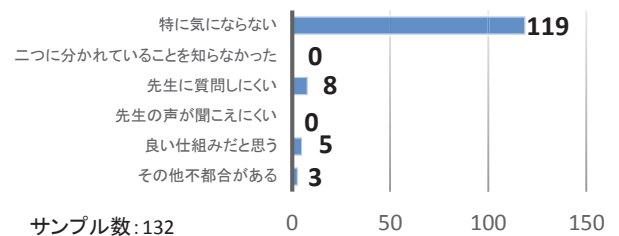


図 3 二つに分かれている教室に対する履修生の意識

教室が二つに分かれていることに関して、どのように思うか (SA 対象、複数回答)

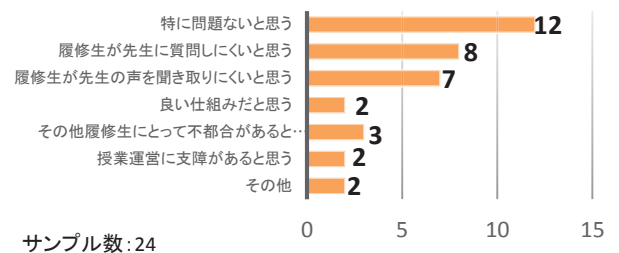


図 4 二つに分かれている教室に対する SA の意識

支障があると思う」と答えたのは 2 名であった。SA も授業運営上大きな困難は抱えていないようである。

#### (2) 履修生の属性が試験得点に及ぼす影響

最終試験の得点をもとに行った分析結果を示す。まず、はじめにどのような履修生が A 教室、あるいは B 教室を選択しているのか知るために、履修生対象アンケートの結果を用いて、「B 教室での受講」を目的変数とした多重ロジステ

ィック回帰分析によりオッズ比を算出した。説明変数に「学年」、「性別」、「受講経験」、「PC 使用時間」、「友人とともに履修しているか」を強制投入法により用いた。なお、「受講経験」は調査時点で他の情報科学科目を受けたことがある、あるいは受けているか否か、「PC 使用時間」は一日当たりの PC 使用時間を 5 段階で回答を求めた。本稿のすべての統計的検定には R version 3.1.0 を使用し、有意水準を 5% に設定した。

結果は表 2 の通りである。結果より、上級学年であること、男性であること、友人とともに履修していること、が B 教室の選択に正の影響を与えていることがわかった。この結果は概ね予想通りであったが、「履修経験」や「PC 使用時間」が教室選択に影響を与えていないことは予想に反するものであった。

次に、最終試験の得点が教室によって異なるのかを t 検定を用いて調べた。加えて、性別、学年による差も分析した。なお、学年の分析には一元配置分散分析を用いた(表 3)。統計学的に有意な差が見られたのは性別だけであり、

表 2 多重ロジスティック回帰分析による  
受講教室選択の比較

説明変数	オッズ比	95%信頼区間	p 値
学年(1~4)	2.02	1.10 ~ 4.05	0.032
性別			
女性	Reference		
男性	2.21	1.04 ~ 4.79	0.042
他の情報科学科目受講経験			
受講経験なし	Reference		
受講経験あり	1.11	0.37 ~ 3.34	0.851
PC 使用時間(5 段階)	0.83	0.57 ~ 1.19	0.315
友人との受講の有無			
ひとりで受講	Reference		
友人と受講	3.65	1.52 ~ 9.32	0.005
切片	0.20	0.04 ~ 0.89	0.042

表 3 最終試験得点の比較

	サンプル数	M	SD	p 値	効果量
性別	男	83	82.58	0.010	0.218
	女	57	87.63		
教室	A 教室	66	84.79	0.889	0.012
	B 教室	74	84.50		
学年	1 年	103	84.28	0.890	0.001
	2 年	25	85.44		
	3 年	7	84.43		
	4 年	5	88.20		

性別と教室には  $r$  を、学年には  $\eta$  を効果量として算出した。

### SA は授業に必要不可欠だったか

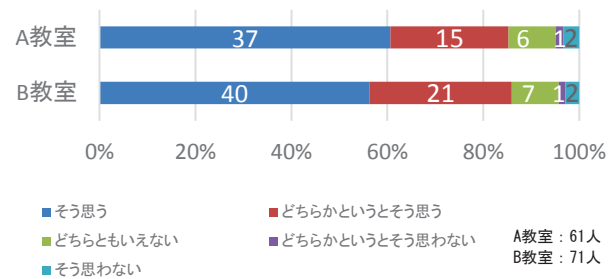


図 5 教室別 SA に対する履修生の評価

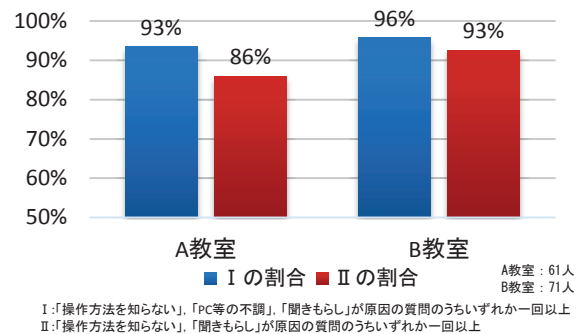


図 6 教室別質問者数の割合

最終試験の得点は教室によって差異があるとは確認されなかった。

### (3) 履修生の SA に対する意識

アンケート調査から履修生の SA に対する意識をまとめた。「SA はコンピュータ基礎の授業に必要不可欠だったか」という項目の教室別の結果は図 5 のとおりである。「そう思う」「どちらかというと思う」を合わせた割合はどちらの教室でも 80%を上回っている。

SA に質問した履修生の数を教室別にまとめたのが図 6 である。B 教室の方が質問者割合はわずかに大きいことがわかる。

### 3.4 分析結果のまとめと考察

以上の分析結果をまとめる。

- (1) 履修生や SA は教室が二つに分かれていることに対して大きな問題を感じていない。
- (2) B 教室(教員のいない教室)で受講しているのは、上級学年、男性、友人とともに受講している履修生が多い。
- (3) 最終試験における得点は A 教室と B 教室との間で差が見受けられなかった。
- (4) 8 割以上の履修生が SA を必要不可欠なものと考えてい

る。

- (5) SA に対する質問に関しても 8 割以上の履修生に経験があり、わずかに B 教室の方がその割合は大きいことがわかった。

SA がこの授業形態に問題を感じていない理由のひとつとして、経験年数の長い SA にとっては慣れが生じていることが考えられる。また、履修生に関してもより自分に適した受講環境を選択できるということが問題を感じていない理由として考えられる。B 教室で受講している履修生の傾向は概ね想像通りの結果であった。最終試験の得点に関しては興味深い結果が得られた。業務中には A 教室の方がより積極的に授業に臨む履修生が多いように感じていた。しかし、両教室間に得点の差が見られなかったため、比較的授業に対して積極的には見えなかった B 教室の履修生でも授業内容を把握できていたと考えられる。また、多くの履修生が SA は必要だと考えており、質問者数の割合も高かった。調査前の筆者らの考えとしては、この質問者数の割合は 50%前後だろうと考えていたため、予想に反する結果であった。また、B 教室でその割合がやや高いことも注目すべき結果である。このことから、教員のいない教室における SA の役割が大きいことを意味すると考えられる。

#### 4.おわりに

関西学院大学の「コンピュータ基礎」は履修生を二つの教室に分け、そのうちの一つの教室は教員がおらず、他方の教室からの教員の声とモニターが共有されるという特異な授業形態をとっている。そこで、その欠点を補うために両教室併せて 5 名の SA が配置されている。しかしながら、これまでにこの授業形態や SA の存在について履修生に意識調査をしてこなかった。今回この調査をするにあたって、履修生に不満はないのか、また、SA はこの授業においてどれほど貢献できているのかという点に着目してきた。調査結果から考えられることは、履修生は本科目に大きな不満を持っておらず、SA を必要不可欠なものであると捉えているということである。また、そのことは質問者数の割合が高いことから述べることができる。最終試験に関しても、両教室間に得点の差があるとは言えず、教員のいない教室であっても教員がいる教室と同等の得点であることから、この授業形態に大きな問題はないこと、SA は教員がいないという点を補っているということがいえる。以上より、SA は履修者数の多い情報基礎科目において重要な役割を担っていると考えられる。

本稿の調査は一つの「コンピュータ基礎」クラスを対象に行ったものである。正確な実態を知るためにはより多くのクラスについて調査を行いたいところであったが、その点については今後の課題としたい。

**謝辞** コンピュータ基礎に関する様々データを提供して頂いた関西学院大学教務機構事務部の皆様に深謝の意を表す。また、アンケートに協力をして頂いた 2015 年度の情報科学科目の SA の皆様にも感謝の意を表す。

#### 参考文献

- 1) 情報処理学会:学部段階における情報専門教育カリキュラム策定に関する調査研究報告書(2008).
- 2) 岡部成玄: 一般情報教育の全国実態調査 (1), 情報処理, 2014 年 12 月号, pp.1400-1403(2014).
- 3) 岡部成玄: 一般情報教育の全国実態調査 (2), 情報処理, 2015 年 1 月号, pp.94-97(2015).
- 4) 布施泉, 岡部成玄: 北海道大学における一般情報教育, Journal of Multimedia Education Research 2010, Vol.1, No.2, pp.44-56(2010).
- 5) 布施泉, 岡部成玄: 北海道大学における一般情報教育—大学院 TA による学習支援と質保証への試み, 教育システム情報学会 第 37 回全国大会講演論文集, pp.246-247(2012).
- 6) 吉田有里果, 辰島裕美: 短期大学の情報教育における SA の試み, 2015 PC Conference, pp.297-298(2015).
- 7) 関西学院大学学生数  
[http://www.kwansei.ac.jp/kikaku/kikaku\\_004166.html](http://www.kwansei.ac.jp/kikaku/kikaku_004166.html)
- 8) 黒崎茂樹: 授業補佐(SA)の「業務報告書」を利用した「社会人基礎力」の向上と SD,FD の試み, 平成 22 年度情報教育研究集会講演論文集, F2-3(4p), (2010).
- 9) 黒崎茂樹: 情報科学科目「コンピュータ基礎」の受講生を対象とした「パソコン利用に関するアンケート」の集計結果, 平成 21 年度情報処理学会関西支部大会講演論文集, F-07(4p), (2009).

## 付録

### 付録 (A) 履修生対象アンケート

1. 何年生ですか?  
a.1年 b.2年 c.3年 d.4年 e.その他
2. 性別  
a.男性 b.女性
3. 総合的に判断して、この授業に満足している。  
5 そう思う。  
4 どちらかというと思う。  
3 どちらともいえない。  
2 どちらかと言うとそうは思わない。  
1 そう思わない。
4. 現在 A 教室 (先生のいる教室), B 教室 (先生のいない教室) のどちらにいますか。  
a. A 教室  
b. B 教室
5. これまでに A 教室, B 教室, どちらの教室で多く受講しましたか。  
a. A 教室  
b. B 教室  
c. 両方同じくらい
6. これまでに「コンピュータ実践」「コンピュータ言語」を受講したことがありますか。または、現在受講していますか。  
a. 受講したことがある。(受講している)  
b. 受講したことはない。(受講していない)
7. 現在、授業時間以外に平均して1日に何時間パソコンを操作していますか。(おおよそで構いません)  
a. 全く操作しない。  
b. 30分以内  
c. 30分~1時間  
d. 1~2時間  
e. 2時間以上
8. 友人と一緒に受講していますか。  
a.はい b.いいえ
9. SA は問題を解決してくれる。  
5 そう思う。  
4 どちらかというと思う。  
3 どちらともいえない。  
2 どちらかと言うとそうは思わない。  
1 そう思わない。
10. B 教室で受講した時に、先生がいないと不都合があると思う。  
5 そう思う。  
4 どちらかというと思う。  
3 どちらともいえない。  
2 どちらかと言うとそうは思わない。  
1 そう思わない。

- ・ B 教室で受講したことがない。
11. SA に以下のような質問をしたことがありますか。該当する物に☑をしてください。(複数回答可)  
a. 操作方法を知らないことによる質問  
b. パソコンやシステムの不調による質問  
c. 聞きもらしが原因の質問
  12. 教室が二つに分かれていることに関して、どのように思いますか。  
以下から、該当するものを選んでください。(複数回答可)  
a. 特に気にならない。  
b. 二つに分かれていることを知らなかった。  
c. 先生に質問しにくい。  
d. 先生の声が聞こえにくい。  
e. 良い仕組みだと思う。  
f. その他不都合がある。
  13. SA はコンピュータ基礎の授業に必要不可欠でしたか。  
5 そう思う。  
4 どちらかというと思う。  
3 どちらともいえない。  
2 どちらかと言うとそうは思わない。  
1 そう思わない。
  14. SA に対して要望があれば書いてください。(自由回答)

### 付録 (B) SA 対象アンケート

- 150人クラスのコン基礎は続けるべきですか。  
5.そう思う。  
4.どちらかというと思う。  
3.どちらともいえない。  
2.どちらかと言うとそうは思わない。  
1.そう思わない。
- B 教室に教員がおらず不便を感じることはありませんか。  
5.そう思う。  
4.どちらかというと思う。  
3.どちらともいえない。  
2.どちらかと言うとそうは思わない。  
1.そう思わない。
- SA として、履修生の質問を解決できていると思いますか。  
5.そう思う。  
4.どちらかというと思う。  
3.どちらともいえない。  
2.どちらかと言うとそうは思わない。  
1.そう思わない。
- 教室が二つに分かれていることに関して、どのように思いますか。(複数回答可)  
1.特に問題ないと思う。  
2.履修生が先生に質問しにくいと思う。

- 3.履修生が先生の声を聞き取りにくいと思う.
- 4.良い仕組みだと思う.
- 5.その他履修生にとって不都合があると思う.
- 6.授業運営に支障があると思う.
- 7.その他

○B 教室にいる履修生は A 教室と比較して、授業に集中していない学生が多いと感じますか.

- 5.そう思う.
- 4.どちらかというと思う.
- 3.どちらともいえない.
- 2.どちらかと言うとそうは思わない.
- 1.そう思わない.

○学生から以下のような質問をうけたことがありますか.  
該当する物を選んでください。(複数回答可)

1. 操作方法を知らないことによる質問
2. パソコンやシステムの不調による質問
3. 聞きもらしが原因の質問